「太陽コーパス」における字音仮名遣いについて

― 小説記事のふりがなから ―

小木曽　智信

キーワード：仮名遣い，漢字音，ふりがな，コーパス

はじめに

「太陽コーパス[1]」に収録されている総合雑誌『太陽』が刊行された明治末期から大正期にかけては、仮名遣いなど国語表記についての議論が活発になされた時期であった。それは単に議論されただけでなく、国語政策について見ると、明治33（1900）年に小学校令施行規則によりいわゆる「棒引き仮名遣い」が制定され、8年後の明治41（1908）には廃止されている。また、大正13（1925）年には臨時国語調査総会で「仮名遣改定案」が提出されている。

明治33年の小学校例については、太陽コーパスに収録された記事の中にも次のような言及があり、当時の知識人の仮名遣いに対する意識が伺われて興味深い。

大町桂月「沢柳政太郎氏を戒む」（教育）　1901年2号

「漢字制限、字音假名遣に關して、余の意見を一言すれば、小學校に用うる漢字を限ることは、必ずしも惡事に非ず。然れどもひろく諸法令、新聞、雜誌等を斟酌して、之を限らざるべからず。先般の漢字制限の粗漏なることは、足下も亦之を認めざるを得ざるべし。字音假名遣の改正は二三の首肯し難き點あれども、大体に於ては、不可なりとはせず。されど二千年來の習慣を破る事故、極めて愼重の態度を取らざるべからず。餘り小癪なる事をすれば、人は心には賛同するも、わざと反抗する弱點を有するものなることを知らざるべからず。假名遣を改むる如き大膽なる事をなさむには、豫め學者の賛同を得、世の操觚者の賛同を得て、然る後に之を發布せざるべからず。中には反對者多かるべけれど、有名なる學者、記者、新聞、雜誌の賛同を得れば、十分也。」

秋月天放「牛門随筆」（家庭）　1901年2号

「近頃の文部省令を見れば、じやうもぜうもふじもふぢも同じ事にせよとの事也、世に所謂假名遣ひなども、日本にては（歐羅巴は然らず）全く不用也、字音に於て何んかあらん、どうでもよろしよろし。」

大町桂月「曖昧なる文部省」（教育）　1901年12号

「文部省が、さきに字音假名遣を改めたるは、英斷なれど、國語の假名遣を改めるだけの勇氣はなかりき。勇氣はなかりしかど、國語もそれに準じて改めて可なるべしとの意見は有せしに似たり、」

これまで、近代以降の文献について字音仮名遣いの調査がなされることは稀であった。しかし、このような時期における字音仮名遣いの実態も、国語表記史の見過ごせない一面であると思われる。煩雑で容易には従うことのできない字音仮名遣いは、和語の歴史的仮名遣いよりも仮名遣いに対する意識をよく反映しているという側面もあろう。

以上のようなことをふまえ、「太陽コーパス」における字音仮名遣いの実態を調査して、その推移をまとめることとした。「太陽コーパス」では小説記事についてのみ、ふりがなが入力されているため、これを調査対象とした。本文中に漢語が仮名書きで現れる場合も存在するが、これは調査の対象外となっている。

ふりがなと著者の関与

ふりがなを調査対象とするにあたって、この時代の印刷物におけるふりがなが誰の手によって、どのような態度でつけられたものであるのかを考慮する必要がある。原稿が著者によって書かれてから出版社、印刷所を経て上梓されるまでの間には、幾人もの手を経てゆくわけであるが、この間、著者によって書かれたものが尊重されそのまま活字になっていたわけではないようである。とりわけふりがなのような補助的なものは、ないがしろにされがちであったろうと想像される。

それ以前に、著者自身によってどれだけふりがなが付けられていたのかもはっきりしない。熟字訓のような場合には、著者の意向が反映されていたものと考えられるが、総ルビの本文のすべてのふりがなについて、著者が一々指定していたとも考えにくい。

京極興一（1998）は夏目漱石の字音仮名遣いについての考え方をまとめている。ここに挙げられた書簡によれば、漱石は、音訓どちらに読むのかを明示するためにふりがなをつけてはいたものの、仮名遣いについては無頓着で、編集・印刷の工程で正しい仮名遣いに直されることを期待していたようである。

以上のようなことから考えて、ある一つの記事の字音仮名遣いを調査しても、それは必ずしも著者の仮名遣いに対する考え方を反映したものであるとはいえないだろう。しかし、『太陽』全体の字音仮名遣いについてみれば、これが当時の出版に関わる人々の仮名遣い意識を反映したものであったことは間違いないはずである。また、読者の側から見るならば、これがこの時代の人々が目の当たりにしていた字音仮名遣いの実態なのであって、代表的なメディアにおける字音仮名遣いのあり方が一般の人々の仮名遣いに対する意識に与えた影響は大きいものがあったはずである。こうしたことから、本調査では記事ごと・著者ごとの仮名遣いにはさほど踏み込まず、『太陽』における仮名遣いの全体的な変化を中心にみてゆくことにしたい。

なお、当時の新聞などでは「ルビつき活字」という印刷技術が用いられることがあった。活字にはじめからルビがついているもので、これが用いられている場合には、ふりがながいつ振られたのかという問題が活字の鋳造の段階に行き着いてしまうことになる。しかし『太陽』にはルビ付き活字が用いられた形跡はない。著者よる執筆から出版社における編集・校正、印刷所における組版の過程においてふりがながつけられたことになる。

「太陽コーパス」における仮名遣いの扱い

「太陽コーパス」では、明らかな誤字を修正するとともに、語の仮名遣いを歴史的仮名遣いに基づいて修正し、注をつけている。漢語についても、ふりがなについても例外ではなく、漢語にふりがなが振ってある場合には、今日正しいとされている歴史的仮名遣い、いわゆる字音仮名遣いを規範として、これに一致しないものは修正されている。『太陽』の記事はおおむね歴史的仮名遣いに則って書かれているが、とりわけ初期には歴史的仮名遣いから逸脱した表記が多く見られる。特に、ふりがなについては誤字も多くかなり雑然とした状態であるが、これらすべてに注をつけた上で修正が加えられている。

「太陽コーパス」が規範としているのは、今日一般に正しいとされている歴史的仮名遣いであるが、この中には江戸時代以来正しいとされてきた仮名遣いが後の研究によって正されることになった例がある。現状の「太陽コーパス」では、これらについても現行の国語辞典（『CD-ROM版 広辞苑 第５版』）に従って修正されている。

しかし『太陽』刊行当時、歴史的仮名遣いとして正しいと考えられていたものを、後の時代の知識でもって改めたものであるから、当時の仮名遣いの意識を考える上で注意が必要である。当時の規範に沿ったものをあえて修正してしまう一方で、かえって当時の規範からはずれたものには注が付けられていないことになるからである。

当時正しいとされていた仮名遣いを今日の知識で改めたものとして次の二つのグループの字音がある。

・韻鏡止摂合音（萬田新造・大矢透説）

誰（すゐ　→　すい）　酔（ずゐ　→　すい）　随（ずゐ　→　ずい）

対（つゐ　→　つい）　追（つゐ　→　つい）　唯（ゆゐ　→　ゆい）

類（るゐ　→　るい）

・韻鏡豪韻唇音（有坂秀世説）

宝（はう　→　ほう）　帽（ばう　→　ぼう）　毛（まう　→　もう）

これとは別に、最近になって仮名遣いが訂正されたものの、一般的な国語辞典ではまだそれに従っていない種類のものがある。

・韻鏡東韻三等（岡本勲・高松政雄説）

弓・終・充・戎・絨・中・虫・隆・雄・融・熊

これらの字音は、『広辞苑』では「イ列音＋ユウ」とされているため、次のように修正した。

きゆう・しゆう・じゆう・ちゆう・ぢゆう・りゆう・ゆう

しかし、『新潮国語辞典 第二版[2]』など新しい成果を盛り込んだ辞書によれば、これらの字は、

漢音　きう　・しう　・じう　・ちう　・ぢう　・りう　・いう

呉音　きう　・しゆう・じゆう・ちう　・ぢう　・りう　・いう

が正しいとされている。

したがって、原文に中［ちう］とあったものを中［ちゆう］に直している場合、結果的に見ると原文は新説に一致していたことになる。とはいえ、この説は『太陽』刊行当時には知られていなかったはずのものであり、当時の規範に照らしてみれば、正しい字音仮名遣いといえるものではなかったと思われる。

次に挙げるものもこれと同様である。

・虞韻舌音・半歯音（沼本克明説）

柱・駐・厨・住・乳　　ちゆう・ぢゆう・にゆう　→　ちう・ぢう・にう

・鍾韻三等（沼本克明説）

重　　漢音　ちよう・呉音　ぢゆ・慣用音　ぢゆう　→　漢音　ちよう・呉音　ぢう

龍　　漢音　りよう・呉音　りゆ・慣用音　りゆう　→　漢音　りよう・呉音　りう

これら最近になって訂正された字音について、「太陽コーパス」では、柱［ちゆう］、重［ぢゆう］などの旧来の仮名遣いを規範形としている。

さらに、意味用法によって使い分けが認められるものとして次のものがある。

方（四角，薬の処方：ほう、その他：はう）山田孝雄・池上禎造・福島邦道説

甲（かふ、こふ）福島邦道説

これらも「太陽コーパス」では、一律に方［はう］、甲［かふ］を規範形として修正されている。

調査の方法

今回の調査は次のような手順で行った。はじめに「太陽コーパス」のデータ（XML文書）から、熟字訓以外の、単字に振られたふりがなをすべて抜き出して一覧表を作成した。この際、仮名遣いに関する注がつけられ、原文に修正を加えられているものはその原文の形もとりだしている。同時に、そのふりがなが現れた年・号・位置、記事の題名・著者等の情報も抜き出した。つづいて、このリストを元データとしてデータベースに読み込み、正しい字音仮名遣いのリストと関連づけて集計した[3]。

正しい字音仮名遣いのリストは、「太陽コーパス」が基準としたものと同じ『CD-ROM版 広辞苑第５版』を元に作成した。『広辞苑』の漢字項目（『岩波漢語辞典』掲載項目に相当）のうち、親文字（見出し）が外字入力されているものと、連濁形と同型となるペア（例：前［ぜん］・前［せん］）を除外した結果、抜き出された漢字項目数は5678、漢字・字音仮名のペアは6880組であった。これに連濁形などの変異形を自動生成して追加した（はじめの仮名が濁音になるもの4487組、半濁音になるもの646組。この変異形は自動生成したものであるため実際には用いられない形も含んでいる）。このリストは音便形などを含んでいないほか、必ずしもすべての字音を網羅したものではない

が、今回はこれに記載があるものを音読されたふりがなとみなし、それ以外のものは訓ないしそれに準ずるものとして調査対象からのぞいた[4]。字音仮名遣いにあわないものは字音のふりがなとみなさないのであるから、「太陽コーパス」の仮名遣いはすべて修正が終わっているものとして扱ったことになる。

調査結果

ふりがなの用例数の推移

以上のようにして採集されたふりがなは、単字に対して振られたもの全体（音訓の両方を含む。以下「単字ルビ」）で、874670例であった。このうち、上記の方法で字音のふりがなとして認定されたもの（以下「字音ルビ」）は376731例で、残りは訓などの調査対象外のものである[5]。

年ごとの用例数は次表のとおりである。1917年からルビの数が倍増するが、これは総ルビの小説記事の割合が増すためである。字音ルビの割合は、年ごとに違いは見られるもののおよそ４割ほどである。年ごとの違いは、総ルビであるか否かと小説の文体の違いによるところが大きい。

表１　単字ルビ・字音ルビの用例数推移

年	1895	1901	1909	1917	1925	1928※	合計
単字ルビ	104477	116712	122457	258242	270908	1860	874670
字音ルビ	32851	44203	44557	118039	136276	805	376731

※1928 年分は２冊のみ。以下同じ

字音仮名遣い誤用率の推移

字音ルビのうち、仮名遣いに関する注が付けられているものは、原文が字音仮名遣いに一致していなかったものである。仮名遣いの誤用[6]について、その割合の年ごとの推移を調べると次のようになる。

表２　全字音ルビの仮名遣い誤用率の推移

年	1895	1901	1909	1917	1925	1928	合計
全用例数	32851	44203	44557	118039	136276	805	376731
誤用数	2815	1863	2045	1994	3024	9	11750
誤用率	8.57%	4.21%	4.59%	1.69%	2.22%	1.12%	3.12%

この表には、たとえば“阿［あ］”のように仮名遣いの誤りを生じる可能性のないものも含まれている。そこで、字音ルビのなかでも仮名遣いの問題を生じるものだけに絞って、それが字音仮名遣いに一致しているかどうかを調査し直したものが次の表である。仮名遣いの問題を生じるもののリストは、実際の誤用の例から一覧を作り、これを「新旧字音仮名遣対照表」（昭和17年国語審議会答申）で補ったものである。

表３　仮名遣いの問題を生じる字音ルビの仮名遣い誤用率の推移

年	1895	1901	1909	1917	1925	1928	合計
用例数※	13456	17852	17147	47454	55035	291	151235
誤用数	2815	1863	2045	1994	3024	9	11750
誤用率	20.92%	10.44%	11.93%	4.20%	5.49%	3.09%	7.77%

※仮名遣いの問題を生じる字音ルビの組874通り

どちらの表によっても、字音仮名遣いに従う率が徐々に高まってゆくことが見てとれる。1917年以降、ルビの数が急激に増えるが、その中でも仮名遣いはより忠実に守られるようになっている。当時正しいとされていた仮名遣いを今日の知識で改めてしまったものがあることを考慮すると、１～２％の誤りしか見られないということは、かなり正確に字音仮名遣いに従って書かれているということができる。

誤用が多い漢字について

誤用が多い漢字と当時通用の仮名遣い

調査結果から、頻繁に字音仮名遣いを誤っている文字を集計してすると表４のようになる。この表では用例数が100以上のものに絞って上位30を挙げた。誤用の用例には、たとえば「じゆう」に対して「じう・ぢゆう・ぢう」など様々な形での誤りがあり得るが、この表では一括している。

この表から、きわめて高い率で誤っている特定の文字群があることがわかる。これらの字には今日正しいとされている字音仮名遣いとは別の、仮名遣いが一般に行われていたものと考えられる。

この中には、当時正しいとされていた仮名遣いを今日の知識で改めたものが目立つ。先述した韻鏡止摂合音（誰酔随対追唯類、「すゐ」→「すい」等）、韻鏡豪韻唇音（宝帽毛、「ばう」→「ぼう」等）について見ると、類［るい］・水［すい］は95％までが類［るゐ］・水［すゐ］という、江戸時代後期以降に正しいとされ後に訂正された仮名遣いによっているのである。同じく隨［ずい］でも90％近くが隨［ずゐ］と書かれている。これらの仮名遣いが訂正されるのは大正時代以降のことであるから、『太陽』の時代には旧来のものが正しい仮名遣いとされていた。したがってこの誤りの多さはむしろ太陽において仮名遣いがかなり守られていたことを示している。

表４　字音仮名遣いの誤りが多い漢字
（「太陽コーパス」全体、用例数100以上、上位30）

字音	誤用数	用例数	誤用率
銃［じゆう］	127	127	100.00%
充［じゆう］	143	146	97.95%
忠［ちゆう］	166	170	97.65%
注［ちゆう］	363	373	97.32%
住［ぢゆう］	114	119	95.80%
類［るい］	419	438	95.66%
水［すい］	535	568	94.19%
中［ぢゆう］	232	248	93.55%
重［ぢゆう］	530	571	92.82%
衆［しゆう］	123	139	88.49%
隨［ずい］	242	282	85.82%
報［ほう］	139	162	85.80%
報［ぽう］	88	104	84.62%
中［ちゆう］	1435	1702	84.31%
暴［ぼう］	80	109	73.39%
帽［ぼう］	128	193	66.32%
從［じゆう］	124	200	62.00%
如［じよ］	54	111	48.65%
房［ばう］	96	206	46.60%
浪［らう］	53	129	41.09%
花［くわ］	40	111	36.04%
覺［かく］	72	278	25.90%
興［きよう］	53	215	24.65%
承［しよう］	60	257	23.35%
渉［せふ］	21	102	20.59%
丈［ぢやう］	43	215	20.00%
勝［しよう］	22	116	18.97%
頂［ちやう］	24	131	18.32%
構［こう］	17	104	16.35%
遠［ゑん］	36	223	16.14%

中［ちゆう］・充［じゆう］など東韻三等の字も目立つ。しかし、これは水［すい］などとは違い、最近になって訂正された字音であり、今日の多くの漢和辞典・国語辞典も「中」の字音を「ちゆう」としている。これらが高い率で「ちう」等の形で表されるのは、古くからの仮名遣いが慣用として守られていたためであるとも考えられる。

誤用とふりがなの文字数

しかし、全く別の理由も考えられる。単に３文字で書くべきところを２文字ですませようとしたのではないかという可能性である。『太陽』では活字のサイズからみて本文一文字あたりのふりがなは２文字がちょうどよく、それより長くなると次の文字にまで振るか、本文にスペースを入れる必要がある。そのため３文字のふりがなを忌避しようという意識が感じられるのである。実際、規範形で３文字になる字音の仮名遣いには全体として誤りが多く、正しいとされる仮名遣いの揺れがあるか否かに関わらず３文字を２文字にしたものが目立つ。

ふりがなの文字数に注目して「３文字が正しいものを２文字に誤っている字音ルビ」「２文字が正しいものを３文字に誤っている字音ルビ」の数を見てみると、前者が4237例あるのに対し、後者は374例しかない。この374例には偏りがあり「合拗音を直音でよいところに用いるもの」「エ列音＋ウをイ列音＋ヤウで表すもの」「エ列音＋フをイ列音＋ヤウで表すもの」が大半を占めている。

一方、３文字でありながら、きわめて誤りの少ない字も存在する。よく使われている文字でも、たとえば、外［ぐわい］の誤用は862例中7例（0.81%）、將［しやう］は380例中3例（0.79%）、純［じゆん］は134例中1例（0.75%）、會［くわい］は1223例中9例（0.74%）などである。

その他の誤用

後に訂正された字音ではなく、またふりがなが２文字になるものであっても、高い率で誤用が見られるものが若干見られる。

如［じよ］は約半数の48.7%までが如［ぢよ］で現れている。［ぢよ］：［じよ］の比を年ごとに見ると、1895年が44：17、1901年に0：1、1907年に9：2、1917年に0：10、1925年に0：27となっており、もともと如［ぢよ］が広く用いられていたものが、1917年頃になってようやく字音仮名遣いの形に収まったもののようである。

このほか、房［ばう］も46.6%と非常に誤用が多いが、その用例のほとんどは「女房」の形で房［ぼう］として現れているものである。これは「女房」という語が日常語と化し、漢語としてとらえられなくなってきていたことと関連する現象であろう。同様の例に「坊主」の「坊」などがある。

他に、カ行合拗音の揺れでも誤用が多い場合がある。誤用率25.9%の覺［かく］は直音でいいところを覺［くわく］と合拗音としたもの、36.0%の花［くわ］はその逆である。ただ、どちらの場合も特定の記事に誤用が集中している。

漢字別の誤用率から見た字音仮名遣いの浸透

表５は、1895年、1909年、1925年に50回以上用いられている字音ルビのうち、誤りの多いもの上位20をあげたものである。

この表を見ると、1895年には20～30％程度の誤りが見られるものが多いが、1909年にはこうしたものの割合が少なくなり、1925年にはほとんど消滅してしまうことがわかる。1925年ではごくわずかな例外をのぞき、90％以上が誤用になるものと10％以下の誤用にとどまるものとにはっきりと二分

されている。誤用率90%以上のものは当時正しいとされていた仮名遣いを今日の知識によって修正したものである。わずかな誤りは、仮名遣いの揺れというよりも、もはや誤字の一種と考えてもよいレベルである。このように、個々の漢字から見ても、前に見た用例数の推移と同様、字音仮名遣いが徐々に浸透し1925年までに字音仮名遣い準拠の体制が整ったことが見てとれる。

表５　字音仮名遣いの誤りが多い漢字（1895年・1909年・1925年）

1895年

字音(正用)	誤用数	用例数	誤用率
中[ちゆう]	129	133	96.99%
浪[らう]	52	56	92.86%
如[じよ]	45	62	72.58%
房[ばう]	85	122	69.67%
生[しやう]	32	60	53.33%
病[びやう]	30	62	48.39%
容[よう]	25	52	48.08%
京[きやう]	48	102	47.06%
郎[らう]	60	172	34.88%
當[たう]	29	88	32.95%
縁[えん]	21	64	32.81%
正[しやう]	23	73	31.51%
方[はう]	44	149	29.53%
入[にふ]	16	56	28.57%
上[じやう]	31	120	25.83%
情[じやう]	13	54	24.07%
女[ぢよ]	18	77	23.38%
用[よう]	29	127	22.83%
町[ちやう]	14	62	22.58%
圓[ゑん]	15	76	19.74%

1909年

字音(正用)	誤用数	用例数	誤用率
類[るい]	85	87	97.70%
忠[ちゆう]	78	80	97.50%
中[ちゆう]	157	172	91.28%
隨[ずい]	53	65	81.54%
覺[かく]	72	98	73.47%
場[ぢやう]	26	58	44.83%
遠[ゑん]	21	55	38.18%
圓[ゑん]	28	97	28.87%
丁[ちやう]	16	68	23.53%
急[きふ]	8	61	13.11%
想[さう]	9	77	11.69%
話[わ]	7	66	10.61%
要[えう]	6	58	10.34%
生[しやう]	9	88	10.23%
月[ぐわつ]	5	50	10.00%
當[たう]	13	148	8.78%
兩[りやう]	7	90	7.78%
調[てう]	5	66	7.58%
畫[ぐわ]	6	83	7.23%
法[はふ]	4	70	5.71%

1925年

字音(正用)	誤用数	用例数	誤用率
重[ぢゆう]	165	166	99.40%
充[じゆう]	58	59	98.31%
中[ぢゆう]	107	109	98.17%
注[ちゆう]	204	208	98.08%
中[ちゆう]	687	702	97.86%
從[じゆう]	71	73	97.26%
乳[にゆう]	55	57	96.49%
類[るい]	129	136	94.85%
隨[ずい]	56	60	93.33%
報[ほう]	83	89	93.26%
水[すい]	202	217	93.09%
睡[すい]	57	66	86.36%
抗[かう]	9	71	12.68%
恐[きよう]	4	53	7.55%
送[そう]	4	59	6.78%
功[こう]	2	50	4.00%
造[ざう]	5	127	3.94%
腦[なう]	2	51	3.92%
威[ゐ]	2	53	3.77%
良[りやう]	3	83	3.61%

用例数50以上のもの、誤用率上位20。

著者別の字音仮名遣い

漢学者の字音仮名遣い

本項の冒頭で、ふりがなの仮名遣いが著者の考え方をどれだけ反映しているものであるかわからないと述べた。しかし、文字ごとに丁寧に見ていくと、少なくとも一部の著者は、自ら規範とする仮名遣いを厳密に守り、それを紙面に反映させていたらしいことがわかる。

たとえば「水」「類」は「太陽コーパス」全体で95%までが水［すゐ］・類［るゐ］という江戸後期以降の形で表記されているが、その中でも次に挙げる著者は一貫して水［すい］・類［るい］を用いている。

依田学海・橋本関雪・森田思軒・樋口一葉・遲塚麗水・条野採菊・電光石火

それぞれの用例数は必ずしも多くないが、水［すい］表記がこれらの著者に集中するのは偶然とは思われない。依田学海は漢学者・劇作家、橋本関雪は儒学者を父に持ち漢詩集も出している日本画家、森田思軒は漢学の素養を生かした「周密文体」で知られる新聞記者・翻訳家、といったように、漢学的素養を持つ著者が多い。彼らは字音の表記についても一家言もち、それを忠実に実行していたものと考えられる。

同じように「帽」「寶」について見ると、帽［ぼう］表記を行っているものとして、やはり依田学海がいるほか、服部担風、吉江喬松、江見水蔭（1895,1901年。1909年は帽［ばう］表記もあり）、上村左川らがおり、ここでも漢学者の名が目立つ。なお、「中」「終」では、中［ちゆう］を一貫して用いた人物は見あたらず、依田学海も常に中［ちう］を用いている。これについては揺れがなかったようである。

こうしてみると、漢学的素養を持つ一部の著者は、当時の慣用に反しても、自らの規範に従っていたことがわかる。そして、少なくとも結果的に、水［すい］・帽［ぼう］・中［ちう］という、今日最新の学説で正しいとされている仮名遣いを守っていたということができる。

字音仮名遣いにこだわらない著者

その一方で、水［すい］、帽［ぼう］表記をとる著者の中には、別の理由で当時通用の仮名遣いを無視していた著者も含まれているようである。表６は、一定以上のふりがな付き記事を書いている（100以上の音読ふりがなが確認できる）著者のうち、字音仮名遣いに誤用が多い（4%以上）著者を一覧にしたものである。ここでは「水」「帽」「中」など問題のある文字を数えていないため、純粋に字音仮名遣いへの準拠の度合いとして見ることができる。

表６　字音仮名遣いの誤用が多い著者

著者	誤用数	用例数	誤用率
遅塚麗水	349	3922	8.90%
上野英三郎	29	326	8.90%
秋月天放	10	141	7.09%
条野採菊	211	3193	6.61%
瓔珞山人	38	612	6.21%
土井晩翠	44	746	5.90%
巌谷小波	364	6377	5.71%
久保天随	15	284	5.28%
村山鳥径	322	6490	4.96%
大町桂月	138	2810	4.91%
金子篤寿	20	476	4.20%

さきに水［すい］と表記する著者としてあげた遅塚麗水・条野採菊らは、上位４人に入るほど誤用が多く、どうやら自ら正しいと考える字音仮名遣いを守っていたというわけではなさそうである。字音仮名遣いに準拠しようという意識がなかった結果、当時の慣用の仮名遣いからもはずれた表記をとっていたものと思われる。

水［すい］・帽［ぼう］表記は、ちょうど現代仮名遣いと同じ、表音的な仮名遣いと一致するわけだが、遅塚麗水の記事全体を見渡すと、必ずしも表音的な仮名遣いをしているわけでもない。しかし、字音については比較的現代仮名遣いに近い簡略な表記を用いるようにしていたようである。条野採菊の記事には特に原則を見いだしがたい。さきに引用したとおり「世に所謂假名遣ひなども、日本にては全く不用也、字音に於て何んかあらん、どうでもよろしよろし。」と述べる秋月天放が表の４番目にあることを考え合わせると、やはり字音仮名遣いに無頓着な著者であったと考えるべきであろう。

このように、一部の著者については特徴的な仮名遣いが見られる。和語の歴史的仮名遣いとあわせてより詳しく調査してみる価値がありそうである。

まとめ

以上、簡単ではあるが「太陽コーパス」のふりがなにおける字音仮名遣いの実態を概観してきた。当時の規範となる仮名遣いは、今日正しいとされている字音仮名遣いのうち大正以降に改められたものを除いたものといってよいが、一部の文字については字音仮名遣いとは異なる仮名遣いが広く定着していたことが確認された。この仮名遣いは、1901年にはまだ一般に広く用いられたものではなかったが、徐々に浸透してゆき、1917年～1925年に至るとそれがほぼ全体に行きわたった。その一方で、一部の執筆者は独自の仮名遣いを守っていたり、あるいは字音仮名遣いに準拠しなかったりという特徴ある仮名遣いを実践していたことが明らかになった。

今後、文字・著者別により詳しく分析し、また著者ごとに仮名遣いに対する発言等を調査することによって、国語表記史の一角における興味深い事実を見いだすことができそうである。

参考文献

沼本克明（1984）「字音仮名遣いとは —その成立と問題点—」『日本語学』Vol.3, No.5

築島　裕（1986）『歴史的仮名遣い その成立と特徴』　中公新書

山田俊雄・築島裕・小林芳規・白藤禮幸（1997）『新潮国語辞典 第二版』付録「字音仮名遣いについて」新潮社

京極興一（1998）『近代日本語の研究 —表記と表現—』　第四節「漱石の字音仮名遣い」　東宛社

田中牧郎（2001）「XMLを利用したコーパスの構築 —『太陽コーパス』を中心に—」『日本語学』Vol.21,No.14

注

1 「太陽コーパス」は国立国語研究所で作成中の大規模テキストデータであり、博文館から刊行されていた総合雑誌『太陽』の1895・1901・1909・1917・1925年の各年12冊（および終刊年1928年の２冊）の本文を電子化したものであり、全体で約1500万字超という大規模な近代日本語資料である。同コーパスは現在開発中であるが、本稿執筆者が非常勤研究員として勤務していることから、今回は内部公開されているβ版（2002年10月9日版）を利用させていただいた。「太陽コーパス」の形式等については田中牧郎（2001）を参照。

2 『新潮国語辞典（初版）』では広辞苑と同様に「中［ちゆう］」などの形がとられている。

3 この作業では、抜き出しにXSLT、関連づけ・集計にリレーショナルデータベースを利用した。

4 この結果、踊り字が入ったふりがなも「字音」には数えられていない。逆に「仕［し］事［ごと］」のように偶然に訓が音と一致する場合には字音として数えている。

5 テキストが「**=**」となる外字は調査対象外とし、置き換えの文字がある場合（例：雞→鷄）には置き換えられた文字として扱った。

6 誤用・誤りという表現は必ずしも適切でないが、わかりやすさを優先して、字音仮名遣いに一致しないものを以下こう呼ぶ。